

## 留学・研究計画書

氏名 和田理寛	留学機関名 タマサート大学
留学先国名 タイ	留学期間 西暦 2012年4月～2014年3月
研究テーマ タイ国における少数民族モン(Mon)の民族変容に関する人類学的研究 —同化、越境労働者の流入、文化継承運動、および宗教実践との相互関係において—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究は、かつて東南アジア大陸部で古代王国を築き、タイやビルマなどの周辺民族に上座部仏教や文字などの文化的影響を及ぼした少数民族モン(Mon)の民族変容について、同化、越境労働者の流入、文化継承運動、宗教実践との相互関係の中で明らかにすることを目的とする。本研究の調査地サムットサーコーン県(以下、S県)はタイ国首都近郊に位置し、近代化以前に下ビルマから移住してきた蒙の集落が広く点在している。こうしたタイ国生まれのモンは、法的にはタイ国民として生きる中で近年急速に同化が進み、モン語やモン文化をどのように次世代に継承するかが目下の「民族問題」となっている。一方、S県は水産加工業等における労働力需要を背景として、ここ20年ほどの間にミャンマーから県人口の4分の1に相当する大量の外国人労働者を受け入れたが、そのうちの大半がモンであるとされる。こうしたミャンマー人越境労働者研究は既に多く見られるが、法的地位から捉えたものが多く、モンであることに基づく社会関係や民族文化継承運動、宗教実践等を論じた研究は少ない。その中でS県出身のいわゆるモン系タイ人であるスガンヤーの論文(2006年)は、彼女にとって同胞かつ他者であるミャンマー出身モン人労働者の民族記念日や言語復興運動に焦点を当てた先駆的研究である。同論文では2国の蒙の接点と断絶が交互に登場し、一般化を拒む繊細な民族関係が現れていて興味深い。ただし、スガンヤー論文は全体的な見取り図提示としての性格が強く、日々の生活に根付いた視点からの考察や、同郷グループの実態調査などについて課題を残す。また宗教実践に関しては、2国のモンを繋ぎ止める媒介者としての仏教寺院の機能について、ミャンマー出身モン僧の受け入れの実態を含め、より詳しく論じる必要がある。さらに、ミャンマー出身のモン人労働者は貸家に数世帯で暮らしており、居住環境の物理的制約が、屋内における多くのタブーを伴った祖霊信仰の実践にどのような影響を及ぼすのかはまだ明らかにされていない。本研究はこのスガンヤー論文を発展的に継承し、2国の蒙の日常生活と宗教実践および文化継承運動のさらなる調査を通して互いを相対化させつつ、両者の断絶および関係の2つの軸が交差する中で生じる動態的な民族の変容について論じる。</p> <p>また人類学における民族論は実体論と幻想論という2つの立場のうち、流動的な民族帰属意識などを強調する幻想論が優位とされてきたが、認識や言説に還元するこうした幻想論的立場は近代民族概念の相対化に貢献する一方、社会関係や文化・言語の変化が認識に影響を及ぼす可能性を軽視しがちである。しかし、例えばあるモン系タイ人の中年女性は、近年モン語の使用機会が減少し、若い世代に至ってはモン語を理解しなくなったことをもって「本当のモンは皆死んでしまった」と申請者に語っているように、幼児期から深く身体化される母語の継承が失敗し世代間に不可逆的な断絶が生じている現実は、「モン」という既存の民族範疇に揺さぶりをかけ、「本当の」という修飾詞の付与を要求している。こうした理論的背景を踏まえ、本研究は修士論文にて提示した民族範疇と社会関係そして身体という3側面の往復運動として民族を捉えるアプローチの有効性についてフィールド調査を基に再検証する。</p>	

# 成果報告書

記入日 2012年 4月 20日

氏名	和田 理寛	留学先国名	タイ、ミャンマー	所属機関	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士後期課程
研究テーマ： タイ国における少数民族モン(Mon)の民族変容に関する人類学的研究 —同化、越境労働者の流入、文化継承運動、および宗教実践との相互関係において—					
留学期間	2012年 4月 ~ 2014年 3月				
<p>■留学先と研究テーマの変更について</p> <p>当初はタイに2年間の留学予定であったが、以下の理由に基づき、留学先をタイに1年間、ミャンマーに1年間と変更した。</p> <p>本研究の調査対象である少数民族モン(Mon)の人々は、タイとミャンマーの2国にまたがって分布している。留学計画当初の時点ではミャンマーにおける調査の可能性は低いと判断したため、タイ国に住まうモンの人々のみを対象とする予定であった。</p> <p>ところで現在モンの本拠地といえるのはミャンマーである。タイに暮らすモンの人々は人口的にミャンマーの蒙の十分の一ほどであり、また若い世代の多くはモン語を解さないなどタイ化も進んでいる。もちろんタイ国のモンも独特の歴史と文化を有し興味深い研究対象であるが、伝統だけでなく現在も文化的社会的に展開し続ける動的な対象としてはミャンマー国のモンに注目する必要がある。しかし、これまでミャンマーにおいて人類学的調査を行うのはタイに比べ容易でなかったため、当初の計画ではタイ国籍者としてのモンに加え、ミャンマーからタイへ外国人労働者として流入してきたモンの人々について研究する予定であった。</p> <p>そうした状況下で留学準備を進める間に、日本でもミャンマー情勢の劇的な変化が日に日に現実的なものとして伝わるようになっていた。そこで、今後のモン研究の可能性を踏まえ、在日ミャンマー大使館を通して同国ヤンゴン外国語大学への留学を申請することになった。また、上述のように現在蒙の多くはミャンマーに住むため、ミャンマー語の習得も必要であった。例年の状況では留学申請1年目に許可を得ることは難しいと思われたが、申請の結果、1年間の留学が許可された。貴財団にも許可をいただいた上で、全2年間の留学期間のうち1年間をタイ、もう1年間をミャンマーと変更することになった。また留学先の変更に基づき、研究テーマは、これまで通りモンと民族論を中核に据えつつも、対象をタイとミャンマーの2国へと拡大することにした。とくにミャンマーでは、後述するように、モン語継承運動やモン僧団の経緯および現状について焦点をあて調査を行ってきた。本成果報告書は、こうした留学国やテーマを変更した後の内容である。</p>					

**■タイにおける留学・調査（2012年4月～2012年11月）**

留学開始と同時にタイ国中部地方にあるモンの一村に住み、定着調査を試みた。同村を調査地とした理由は、他地域に比べて現在でもモン語やモン文化を色濃く残していること、ならびにミャンマーからの外国人労働者としてのモンが多く居住する地域とそれほど離れていないことなどに拠る。また当初の計画では先に外国人労働者であるミャンマー一国出身のモンについて調べ、2年目にタイ国モンの村落調査を行う予定であったが、ミャンマー留学が許可される可能性を考慮して、ミャンマーでは困難な村落定着調査を行うことができるタイ国モンの調査を優先させた。

この調査では、いわゆるモンの伝統文化、とくに宗教的側面について基礎的な知識を得ることが出来た。こうした内容については先行研究もあるが、実際に村落に暮らし、身近に体感することができたのは貴重な機会であった。これまであまり報告されてこなかったと思われる儀礼も確認することもできた。現段階ではその成果を学問的文脈に位置づけることが出来ていないが、少なくともモンの伝統生活が上座部仏教、祖霊信仰、多種の占いなど起源を異にする多くの宗教や信仰から構成されている状況を全体的に捉える眼差しが必要ではないかと考えている。また、調査の際にタイ語などを使用しモン語を用いていない先行研究も多い中、本調査において伝統文化や宗教にまつわるモン語語彙を収集できたのは、タイとミャンマーそれぞれの国の地域研究の一部としてだけでなく、一国研究の枠を超えた「モン研究」としての可能性を開く上で前進であると信じる。さらにモン文語をめぐっては、およそ1世紀前、タイの政策により仏教僧の教法学習にとって重要なモン語使用の教法試験が公式に廃止され全てタイ語使用になって以来、主要な実用性を失って今日に至るが、調査村の寺院にてモン文語教育が消滅したのはそれより半世紀ほど遅れたおよそ1950年代であることが分かった。この理由については今後考察するとして、少なくともモンがどのようにタイへの同化を経験してきたか詳細に扱った研究は管見の限りこれまで見当たらず、同化主義的タイの政策がいかに人々の言語状況に影響を及ぼしてきたか考察する上で、一例を示すことができると思われる。

一方、以下のような重要な課題も残された。まず、調査村における日常生活の実態を把握することができなかった。村落規模が大き過ぎたこと、現金収入獲得のため村人が多忙であったことなどが量的調査を難しくし、さらに私が寺院住まいであったことも人々の普段の生活を体感する機会を欠く原因であった。このため、宗教世界と世俗社会の関連性を捉えることができなかった点は大きな失敗である。また、祖霊舞踊儀礼や祖霊信仰などについてはモンの宗教を考える上で非常に重要であり、かつ先行研究も少ないが、こうした信仰は秘儀的性格が強く、調査を断られることもしばしばあり、踏み込んだ研究については諦めざるを得なかった。代わりに、調査を受け入れてくれた他県におけるモン集落の祖霊舞踊儀礼について観察および聞き取りを実施したが、調査村の文脈の中で語ることはできないのは残念である。

ちなみに在日ミャンマー大使館から留学許可の連絡が届いたのは、この調査開始年の11月であった。

**■ミャンマーにおける留学・調査（2012年12月～2013年11月）**

ミャンマーでは基本的にヤンゴンに在住し、授業期間中は基本的に平日毎日所属先の外国語大学にて

ミャンマー語授業に出席した。本格的なミャンマー語学習は初めてであり、ミャンマー語習得は思った以上に上手いかず、今後も継続して学習する必要がある。しかし、地域研究者として陥りがちな一国研究の殻を破るきっかけを得ることができたのは大きな収穫であった。これまではタイ研究に携わる者としてタイへの関心に偏りがちであったが、ミャンマー留学開始後は当2国を比較することが可能になるなどより広い視野をもつことが出来るようになった。さらに、こうして異なる2国にまたがって住まうモンの人々を研究することは、モン研究がそれぞれの国の文脈で語られがちなこと、現地当事者も含め1国について詳しい者も隣国の状況についてはあまり知らない現状などについて気がつかせてくれた。

また、モン語学習については、タイ滞在時に引き続きヤンゴン在住期間も継続した。現在もモン語が生きているミャンマーではモン語で書かれた資料が多くあり、それらを活用するためにモン語学習は重要である。モン語読解力はまだ不十分であり、今後も継続してその向上に努める予定である。

このミャンマー留学中の調査については、大学の授業がない休日を利用して聞き取りや資料収集を行った。調査期間が短く人類学的な定着調査は困難であったため、テーマをモン文語教育の現状および経緯と絞った上で調査を進めた。既に同化の進んだタイとは反対に、ミャンマーではモン文語の復興とさえ呼べるような状況にあり、大変興味深い事例を収集することができた。現在のモン文語教育の場は、主に(1)モン仏教僧院、(2)夏季講習、(3)民族学校の3つである。モン僧院での教育とは主に仏教僧を対象とする伝統的な形を踏襲したものであるが、重要なのはミャンマー政府実施の教法試験において、ミャンマー語、パーリ語に並びモン語の使用が認められている点である。他の少数民族語による受験は認められておらず、モンは特別な扱いを受けていると言える。ところで、英領期からずっと公認されてきたとされるこの教法試験におけるモン語使用であるが、1980年代、政府は教法試験の一部にミャンマー語能力を問う試験を導入したことをきっかけにモン僧団の間で顕著な動きがあった。モン僧は、サンガ内部の僧派(ミャンマー語: ガイン/タイ語: ニカーイ)からみた場合、(A)非公認ながらモン僧の大多数を擁するレーモンニャ派、(B)タイ国のタムユット派が輸入された公認マハーイェン派、(C)ビルマ系を主流とする厳格な公認シュエージン派の3派いずれかに所属する。このうちレーモンニャ派のみが、このミャンマー語試験導入に反発し、政府教法試験をボイコットして、派内独自の教法試験を実施するに至った。その後、段階的にミャンマー語試験は廃止され、現在レーモンニャ派モン僧も政府試験を再び受験するようになっている。ただし、レーモンニャ派独自試験はそのまま継続され、今では年間1600名もの受験者を有し、モン僧にとっての一大行事として発展した。また、マハーイェン派、シュエージン・モン派もモン語を使用するそれぞれ独自の教法試験を開催するようになって現在に至る。モン僧団の3派の実体はこうしてそれぞれ独自の教法試験開催を基盤として成り立つと考えられる。こうした事実関係の詳細はこれまでミャンマー研究において言及されてこなかったと思われる。

続いてモン文語の夏季講習がモン集住地域にて広範に実施されている。この活動においては、主にモン僧が先導者であり、小中高生くらいに当たる子どもや若者が学生である。講習期間は年間1~2ヶ月と短いものの、各地域6~12年ほどかけて全過程を学習する仕組みを設け、関心のある学生はモン文語能力を伸ばすことが可能になっている。また、各村レベルだけでなく、郡レベルでの合同試験を実施し、さらにその上の段には全国合同試験を設け、そうした合同試験を主催する組織化も進んでいる。こ

こうした夏季講習の発展経緯は、村や郡レベルから徐々に上部へと統一されていく過程であり、現在でも各村や各郡の独自性を容認した上での統一であって、政府を有さない少数民族の組織化の一例として興味深い。また、こうした夏季講習の現状や経緯は、各地域に情報が分散しており、調査や資料収集は決して容易ではなかった。外国人立ち入り禁止の地域には入れないため、現在でも全地域の情報を網羅するには至っていないが、それでもこれまで明らかにされてこなかった夏季講習の実態と経緯の概要を把握できたことは大きな収穫であった。

さらに、モン集住地域で広範に展開するモン民族学校の存在も看過することはできない。民族学校はアクセスが難しい地域に多く、直接訪問できたのは今回の留学中は1校に留まる。それでも、他の情報なども合わせて、民族学校の現状の一面について確認することができた。民族学校は、モン語とミャンマー語のバイリンガルを育成するのが目的である。その手法はカナダ等で有名なイマージョン教育とも重なるもので、バイリンガル教育としては一定の成果を収めていると思われる。また、高校卒業時にミャンマー政府の高卒試験を受験することができ、合格すれば大学への進学も認められており、ミャンマーの少数民族語教育の機会はずしも公的に全く容認されていないわけではないことが分かる。

以上の調査結果には新しい情報が多々含まれ、ミャンマー留学および調査は大変有意義であった。これらの文語教育はそのほかの政治史や少数民族運動とも関わりがあり、今後はそうした文脈の中に位置づけて考察することを計画している。

#### ■タイでの留学・調査およびミャンマーでの補足調査（2013年12月～2014年3月）

ミャンマー留学を終えた残り4ヶ月間は、基本的にタイに滞在した。この最後の4ヶ月間は、主にタイにおけるモン派僧団の現状と過去に関する資料収集などを行った。時間が限られていたため資料収集に留まり、資料の読解は今後の課題である。また、2月には北タイで開催されたモン民族記念日に参加した。タイにおける同民族記念日はこれまで2回参加経験があるが、中部タイを中心に分布するモンの人々が、このように民族記念日をタイ中部から離れたタイ北部で開催したこと自体、私自身修士論文で書いた議論や予想を覆すものであった。さらに、この期間中ミャンマーでの補足調査と、タイ側にある国境地域での調査も行った。同国境地域は4年前に2ヶ月ほど定着調査を行った地域であるが、その後の経緯の把握と共に、モン文語教育をめぐるインフォーマントの意見が全く異なるものに変化していることが分かった。

以上のように、この2年間を通して、タイではモンの伝統文化の概要について把握し、またミャンマーでは先行研究がほとんどないモン文語教育の現状と発展経緯の概略を押さえることができた。調査の過程では挫折も経験し、その成果のよし悪しについては今後の評価を待つほかない。また、語学に加え、資料読解や先行研究への位置づけなど改めて取り組まなければならない課題が山積している。まだ時間がかかるかも知れないが、これまであまり関心を集めてこなかった現代モン研究が進展し、一国地域研究を超えた形で展開されるきっかけになることを目指して、本留学の成果を学会発表や論文としてまとめていく予定である。

## ■留学の感想

この2年間の留学では、タイに1年間、ミャンマーに1年間と、2国で学ぶ機会を得た。タイにはそれ以前既に2年間留学経験があり、日本でも学部時代タイ語専攻に属するなど慣れ親しんだ国である。一方、ミャンマー留学は今回が初めてであり、ミャンマー語も初心者で、私にとって新たな挑戦であった。

ところで、人類学的な研究はフィールド調査を行う。フィールド調査は、実際に研究対象とする人々の暮らす地域に赴き短期または長期に滞在する。そして、インタビューや、参与観察つまり自分自身の体験を介して他者理解を目指す手法等によって調査を進める。書かれた資料があれば、それらも収集する。いずれにせよフィールド調査には現地の協力者が必須である。宿泊施設や食堂のない場所であれば寝る場所や食事を提供してもらわなければならないし、調査対象の人々からは時間を割いて話を聞かせてもらわなければならない。地域の知識人であり、かつ話し好き世話好きな理想のキーインフォーマントに出会うことができれば、学生にとってこれ以上の幸運はない。フィールド調査はこうして現地の人々と深い関わり合いをもつ。困難にも多々直面するなかで、他者との触れ合いは調査の醍醐味でもある。

私の場合、慣れ親しんだはずのタイでフィールド調査に苦労した。協力してくれる人々は多くいた。宿がない場合は寺院に泊めてもらい、生活には困らなかった。しかし、思ったようにインタビューに答えてくれる人がいない、モン語を学びたくとも会話は意思疎通に便利なタイ語になってしまう、寺院住まいのため現地の生活感が掴めないなど、なかなか期待通りには進まなかった。そして、こうした主な原因は自分自身の忍耐のなさや勉強不足にあると自覚し、だんだんと辛い気持ちになる一方であった。調査として成功とはいえないが、今振り返ればフィールド調査の難しさを身をもって知るよい経験であった。

反対に、初めて長期滞在するミャンマーは、生活こそ大変だったものの、多くの人の支えや協力のおかげで調査を進めることができた。言葉が通じなかったり、腸チフスを患うも誤診されたり、公文書が紛失して手元に届かなかったりと、いろいろと困難は生じた。しかしそんなことはどうでもよいと思えるくらい、この留学での出会いを通してミャンマーを好きになった。ミャンマーでは外国人が長期滞場のフィールド調査を行うのは依然難しい状況である。私も定着調査は諦め、主にインタビューと文献収集に徹した。しかし、そうした手法であっても、右も左も分からないなか知らない土地で調査を行うのは容易ではない。私の場合、調査のきっかけを作ってくれたのは、タイの村落調査中に会ったミャンマー出身の方であった。出会いはどこから生じ、どのように展開するか予想できない。この方に始まって様々な形で協力してくれる人々と次々に出会うことになり、調査は思った以上に進展した。こうした友人や協力者が一人でも欠けては今手にしている研究成果を得ることは決してなかった。

村落調査にこそ苦労したタイだが、この留学を通し、調査協力者でもある友人知人との絆は深まった。そのなかには数年来の知り合いも多くいる。調査のためだけに親しくする関係は空しいと思う。こうした友人たちとは今後も生涯を通じて付き合いしていくであろうし、また出来る限り調査対象の人々に研究成果を還元したい。塞ぎ込む期間も、出会いの幸運に恵まれた期間も、様々な経験したこの2年間であったが、両面含め今後の人生にとって大変実りある時間を過ごすことができた。この留学を生かし、今後は日本とタイおよびミャンマーの交流に少しでも貢献できるよう努めていく所存である。



### カレン・シャン・カレン

2013年1月ヤンゴンでもカレン新年を祝う祭典が盛大に催された。その日祭典参加者の一部は市街から東にある連邦民族村へ。国内の諸民族を紹介するこのテーマパークが今日も右を向いても左を向いてもカレンの衣装を着た観客で溢れている。写真は「シャンの家」の前にて。シャンの衣装を身にまとう真ん中の女性は民族村のスタッフと思われる。彼女の両脇に立つのはカレンの衣装を着た若者たち。



### 出安居

2012年タイ国モン寺にて出安居行事の一幕。写真正面の奥に見える四角錐の屋根のもとには僧が座し本生譚(仏教説話)の読み聞かせを行っている。今年出家したこの若い僧によるタイ語の説法をじっと聞き入るのは白服の年配者たち。この少し前には寺院住職がモン語による読み聞かせを行っていた。住職も若い僧も在家年配者たちも皆この村の出身である。一方、写真手前で左手を向いて座しているのはミャンマーからタイに出稼ぎにきたモンの人たち。仏像や仏塔の傘を寺院に寄進するため説法後に僧が現れるのを待っている。



### タポー・タパオ

2013年7月ヤンゴンでは初めて開催された、モンの人々が仏陀に初めて会った日を記念する行事。100人ほど集った蒙の若者たちは、タポーとタパオ兄弟が仏陀から聖髪をもらったという伝説を模った像に向かって手を合わせている。奥に見えるのはミャンマーを代表するシュエダゴン仏塔。伝説では仏陀の聖髪8本がこの仏塔の下に安置されているとされる。